

茨城県下館市

弁 天 遺 跡

- 発掘調査報告書 -

2004

下館市教育委員会

序

下館市は首都70km圏にあり、関東平野の北部、茨城県の西部に位置しており、市内には鬼怒川、大谷川、勤行川、小貝川の4本の一級河川が南北に貫流しております。

今回、発掘調査を行なった弁天遺跡は、鬼怒川左岸の台地縁辺部女方地区に所在し、東には紫峰筑波・加波の山々、北には日光、那須の連山を眺望できる景勝の地であります。この女方地区では、古くは田中國男博士の献身的な調査研究により、人面付壺型土器が発見され、後の研究により弥生時代の「再葬墓」と呼ばれる墓制が明らかにされております。今回の調査では、縄文時代後期の遺物が多数出土し、当地域の文化の様相を解明する上で欠かすことのできない貴重な史料を得ることができました。

最後になりましたが、今回の調査に際し発掘調査から報告書の作成に至るまで、ご尽力いただきました山武考古学研究所ならびに関係機関・関係各位に衷心よりお礼申し上げますとともに、埋蔵文化財保護に多大なるご協力を賜りました池羽一男氏、大東建託株式会社に、あらためて深甚な謝意を表したいと存じます。

平成16年2月

下館市教育委員会 教育長 大泊 信雄

例 言

1. 本書は、下館市女方に所在する弁天遺跡発掘調査報告書である。
2. 調査は、集合住宅建設に伴い、下館市教育委員会の指導の下に、事業主より委託を受けた山武考古学研究所が行なった。
3. 調査については、以下の通りである。
所在地 茨城県下館市大字女方字両海105-1、105-7
調査面積 15㎡
調査期間 平成15年10月21日～10月27日
調査担当 高野浩之（山武考古学研究所所員）
4. 本書の編集は、高野が行なった。
5. 調査に係る図面・写真・遺物等の資料は、一括して下館市教育委員会が保管している。
6. 調査中は、下記の諸氏、諸機関に協力を得た。記して感謝の意を表します。（敬称略・順不同）
池羽一男 大東建設㈱ 藤東日本重機
祐新成田総合社
7. 調査の参加者は以下の通りである。（順不同）
五十嵐 隆 青木みね子 北原 隆

凡 例

1. 挿図中方位は座標軸北を示す。
2. 挿図中に使用したスクリーンパターンは以下の通りである。



目 次

序文 例言 凡例 目次	
I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と歴史的環境	3
III 試掘調査の概要	3
IV 調査の方法と経過	3
V 検出された遺構と遺物	5
挿 図 目 次	
第1図 遺跡位置図	1
第2図 遺跡範囲図	2
第3図 試掘調査実測図	2
第4図 調査区平面図・土層断面図	4
第5図 出土遺物（1）	4
第6図 出土遺物（2）	6

表 目 次

第1表 石器計測表	5
-----------	---

写真図版目次

図版 1	1. 調査区完掘状況全景（西から） 2. 調査前現況（南から） 3. 1層確認状況（東から） 4. 2層確認状況（東から） 5. 2層遺物出土状況（南から）
図版 2	1. 3層確認状況（東から） 2. 3層遺物出土状況（西から） 3. 3層遺物出土状況（東から） 4. 3層遺物出土状況（南東から） 5. 1号土坑完掘全景（西から） 6. 調査区土層堆積状況（南から） 出土遺物（1）
図版 3	出土遺物（2）

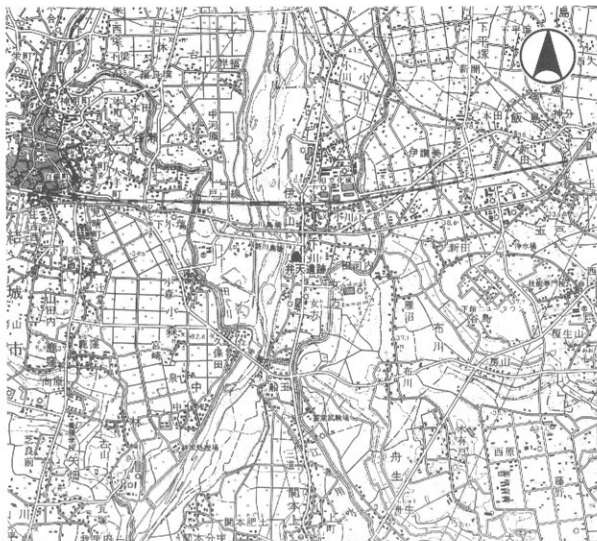
I 調査に至る経緯

平成15年7月、大東建託株式会社から、池羽一男氏所有の下館市大字女方105-1.105-7において集合住宅を建設したい旨の連絡があった。この地は、弁天遺跡（下館市遺跡番号028）の範囲内であり、集合住宅建設に際して事前に埋蔵文化財の調査が必要である旨を伝え、その取り扱いについて協議を進めていった。

その結果、埋蔵文化財の所在の有無を確認するための試掘調査を実施することとなり9月10日に行なった。この試掘調査により、集合住宅建設予定地の全域にわたり遺物を包含する層が確認された。

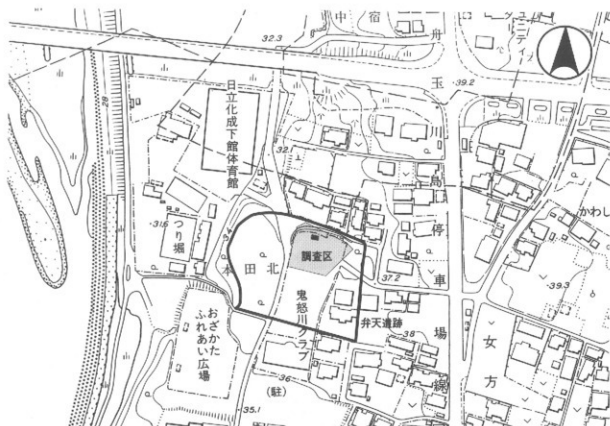
市教育委員会では、この結果を踏まえて、遺跡の取り扱いについて再度協議を行なった。協議の結果、池羽氏においては、予定通り建設を行ないたいということで、集合住宅建設部分については、盛土をすることで保護層を設け遺跡の破壊を回避し、合併浄化槽を設置する部分については、記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなった。

その後、9月19日付け文化庁長官あて埋蔵文化財発掘の届出を提出し、池羽一男氏、市教育委員会、山武考古学研究所の三者により調査を円滑に進めるための協定を締結し、調査経費については池羽一男氏が負担し、山武考古学研究所を調査主体とし、市教育委員会指導のもと、10月21日から27日まで発掘調査を行なった。



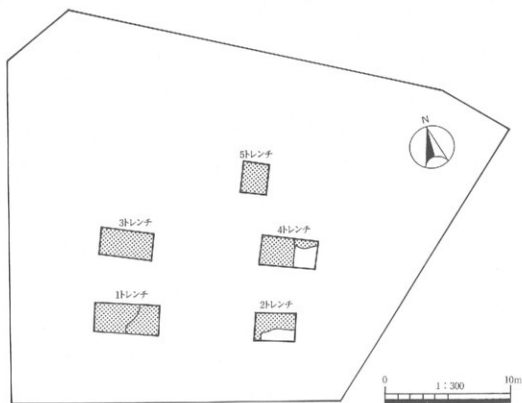
第1図 遺跡位置図

S=1:50,000



第2図 遺跡範囲図

S=1:2,500



第3図 試掘調査実測図

II 遺跡の位置と歴史的環境

下館市は、茨城県西部に位置し、栃木県境に隣接している。市域は、宝積寺台地と呼ばれる台地上に立地し、標高は北で56m、南で38mと南傾した平野を形成している。西には鬼怒川、東には小貝川が南流し、中央部を鮎行川が流れて小貝川へと合流する。下館市内に所在する遺跡は、この3河川沿岸に多く周知され、河川を中心に集落が展開されていたことが窺われる。

弁天遺跡は標高40~41mを測る鬼怒川左岸の台地縁辺部にあって、JR川島駅からは南方約0.5kmの地点に位置する。女方地区は縄文時代の遺跡が多く所在する。時期は、縄文時代早期から晩期の遺物が散布する場所として周知され、その種類も多岐に亘る。弥生時代の遺跡は、再葬墓の遺跡として考古学史上著名な女方遺跡が、本遺跡の南方約0.6kmの地点に所在する。古墳時代の遺跡は「六十六塚」と称された古墳群が周知されている。古墳は大部分が遷滅し、現在は3基が現存するのみである。その2基が本遺跡に隣接している。

弁天遺跡は女方地内の西端に所在し、東西100m、南北70mの範囲に広がっている。古くから「下川島弁天の遺跡」として周知され、縄文時代早期~後期の土器片のほか、打製・磨製石斧、石皿片などが多く採取されている遺跡である。

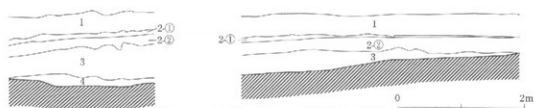
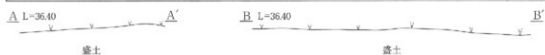
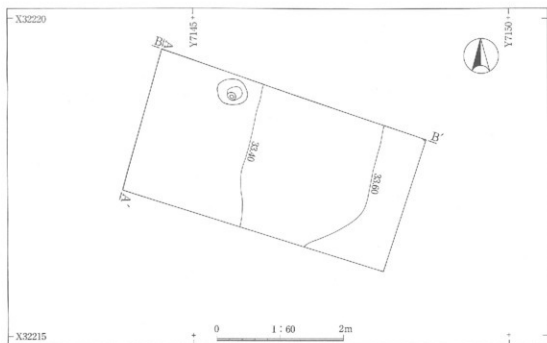
III 試掘調査の概要

試掘調査の地点は遺跡の中央部に位置し、現況は更地であるが数年前までは日立化成のゲストハウスが建設されていた場所である。試掘調査は、遺構確認面に影響のある建物部分と浄化槽部分を対象として、5箇所のトレンチを設定して行なった(第3図参照)。調査区の現況は標高41m前後の平坦な更地であったが、0.8~1.1mの盛土が堆積しており、遺構確認面まで達していた。建物及び浄化槽部分にかかる範囲に設定した5箇所のトレンチ(1~5T)の内、1・3・5Tは全面に遺物包含層が遺存することが判明した。1・3Tは古墳に近接していることから周溝の可能性も予想されたが、1Tでは確認面から約0.8mの深さまで攪乱を受けており、さらに1m以上の深さまで包含層が遺存することが判明した事、5Tまで包含層が延びる事から埋没谷である可能性が高いと判断された。遺物は縄文土器片が多量に出土し、石器(蚌の果石等)も出土している。2・4Tは遺物包含層の一部が検出されているが西側トレンチより層厚は薄いと予想される。両トレンチ東端からはローム層を確認することができた。包含層は西側トレンチ方向に連続するものと判断された。遺物は、縄文土器片が多量出土している。

IV 調査の方法と経過

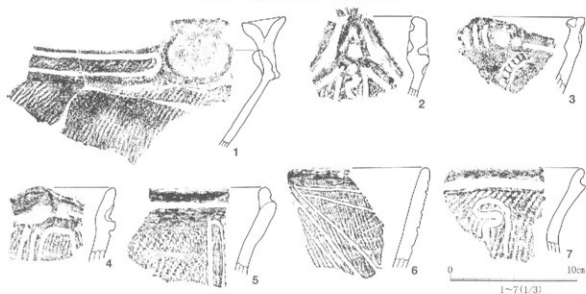
調査は、浄化槽部分15㎡を対象に調査区を設定して行なった。表土除去は重機を使用して除去し、遺物包含層の確認面まで掘り下げた。遺物包含層の調査は人力によって掘り下げを行なった。調査区の位置は公共座標によって記録し、調査区内の実測は、1/20縮尺を基本に、調査区の平面図、土層断面図、遺物出土状況図を作成した。遺物は、東西両壁面で確認した層位に従って取り上げ、出土地点を記録した。写真は35mm判白黒、同判カラーリバーサル、6×7判白黒を用い、随時撮影を行なった。

調査経過は、10月21日、表土除去。23日より25日まで遺物包含層の掘り下げ。さらに遺物包含層を掘り上げて行く過程で、土層断面実測及び遺物出土の実測の実施。25日完掘状況の記録。27日に埋め戻し及び撤収。現地発掘調査を終了した。



- 1 粘褐色土 H0Y23-4 灰色砂子少量、灰色下ロ→中層部、粘性なし、しまり強。
- 2① 灰褐色土 H0Y23-3 灰色砂子少量、粘性なし、しまり強。
- 2② 粘褐色土 H0Y23-3 灰色砂子少量、粘性あり、しまりあり。
- 3 粘褐色土 H0Y23-3 灰色砂子少量、粘性あり、しまりあり。
- 4 二色土質褐色土 H0Y25-4 浅黄色砂質土少量、粘性あり、しまりあり。

第4図 調査区平面図・土層断面図



第5図 出土遺物(1)

V 検出された遺構と遺物

調査区の堆積土層は1～3層に分層される。1層は暗褐色土で、粘性はなくしまりは弱い。2層は色調が黒褐色土で、粘性やしまりは1層に類似し、1・2層共にほぼ水平に堆積している。3層は暗褐色土で粘性、しまりを共に有する。層厚は東側で薄く、西側で厚い堆積を示し、東から西方向へ傾斜していることが見て取れる。3層下は粘質土の基盤層となり、東から西方向への緩斜面を呈した地形である。傾斜の比高差は0.33～0.44mを測る。

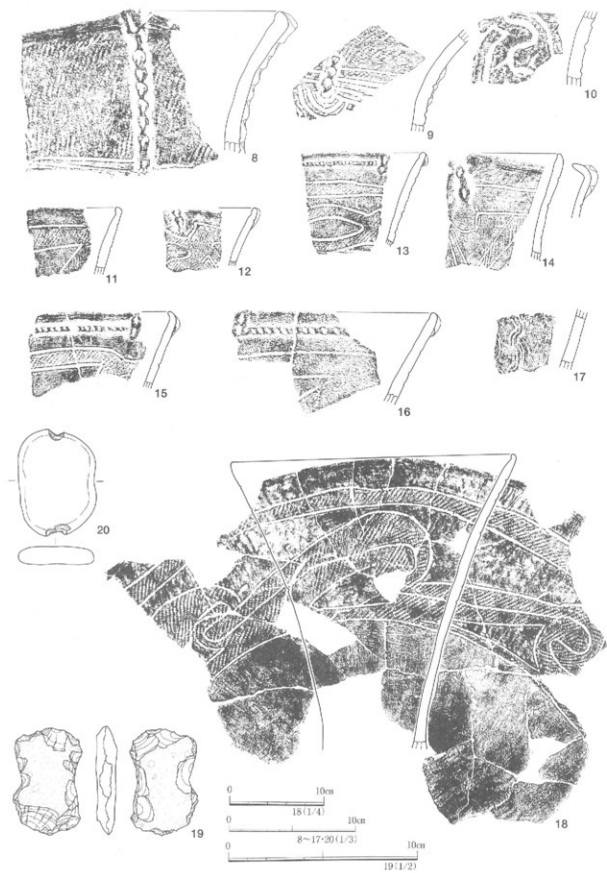
遺構は3層下の基盤層から上坑が1基検出されている。径0.5m、深さ0.09mの円形で、底面南西寄りに小穴を持つ。覆土は遺物包含層3層と同様の単層である。

遺物は、1層～3層まで万遍無く含まれ、出土状況に規則性は見られない。1、2層中の出土遺物は、細片で摩滅した土器片が大半を占め、縄文土器片が主体であるが土師器片も若干出土している。3層からは縄文土器と石器が主体となって出土している。遺物中には被熱した礫片も出土することから、近接地に集落が遺存した可能性が示唆される。図版中の遺物は3層中から出土したものである。

1はラッパ状突起を配した深鉢口縁である。縄文中期末から後期初頭に位置付けられると考えられる。2～10は後期堀之内Ⅰ式期に比定される土器群である。地文は縄文、沈線は兼手文、懸垂文、弧線状文が施されている。2～4は波状口縁部片である。2には首孔、3には穿孔が穿たれている。5～7は平縁口縁片である。5は0段多糸縄文が施文され、6は櫛状工具で施された文様に直線的な沈線が描かれている。8は波状口縁部片である。縄文を地文とし、口縁から鎖状に刺突された隆帯が垂下する。頸部は2重の沈線による区画文が見られる。11～18は後期堀之内Ⅱ式に比定される土器群である。沈線区画内に縄文が充填されたものが主体となって出土している。その内13～16は口縁直下に刺突が施された隆帯を配し、8の字貼付文が施された土器群である。17は波状沈線が施された土器片である。18は朝顔形を呈した平縁口縁の深鉢である。口縁は外側に広がり、文様は崩れた人組状の沈線区画内充填縄文が横方向へ3単位の構成を見せ、胴下部は無紋となっている。19～28は石器である。ここでは19・20の2点を図示し、ほか8点については写真図版に掲載した。19は打製石斧で、分銅形を呈する小型品である。扁平な円礫を素材とするもので、表裏面の大半に礫面を残す。ほかに折損した打製石斧の破片が2点出土している。20～24は礫石錘である。いずれも扁平な円礫を素材とし、上下両端を打ち欠いて切込みが施される。このほかに未成品と思われるものが1点出土している。25は砥石である。平滑な磨面をもち、一部浅い溝状を呈する。磨製石斧に使用された可能性がある。26は敲石である。正面中央および側縁に敲打痕がみとめられる。27・28は石皿である。27は正面が浅い皿状となるもので、凹面はざらつく。裏面中央に凹みが3箇所みとめられる。28は石皿の小破片である。

表1 石器計測表

No.	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	遺存率	備	考
19	打製石斧	5.7	3.6	1.1	29	定形	分銅形を呈する小型品	
20	礫石錘	8.3	6.1	1.4	130	定形	扁平な円礫、上下両端に切込み	
21	礫石錘	7.9	5.1	1.3	83	定形	扁平な円礫、上下両端に切込み	
22	礫石錘	7.0	4.2	1.6	68	定形	扁平な円礫、上下両端に切込み	
23	礫石錘	5.7	3.6	1.1	33	定形	扁平な円礫、上下両端に切込み	
24	礫石錘	4.7	3.6	1.3	32	定形	扁平な円礫、上下両端に切込み	
25	砥石	(8.5)	(6.8)	(2.3)	(17.6)	大半欠損	平滑な磨面、一部浅い溝状を呈する	
26	敲石	11.3	7.4	4.1	395	定形	正面中央及び側縁に敲打痕	
27	石皿+門石	15.5	10.9	6.0	1154	定形	浅い皿状の凹面、裏面の中央に凹み3箇所あり	
28	石皿	-	-	-	-	小破片		



第6図 出土遺物(2)



1. 調査区完掘状況全景（西から）



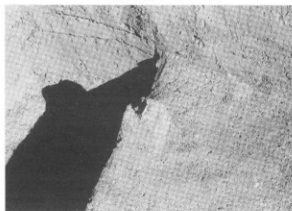
2. 調査前現況（南から）



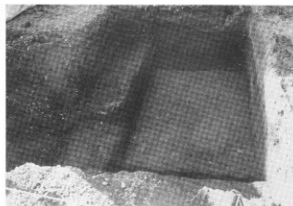
3. 1層確認状況（東から）



4. 2層確認状況（東から）



5. 2層遺物出土状況（南から）



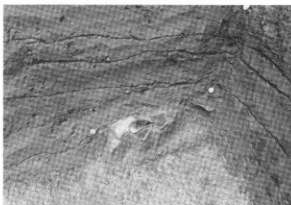
1. 3層確認状況 (東から)



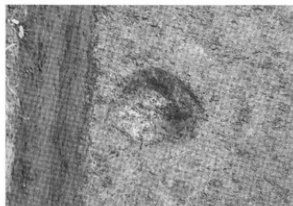
2. 3層遺物出土状況 (西から)



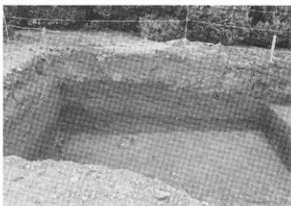
3. 3層遺物出土状況 (東から)



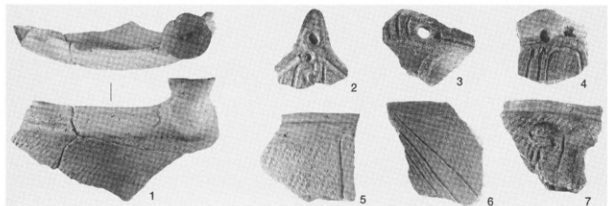
4. 3層遺物出土状況 (南東から)



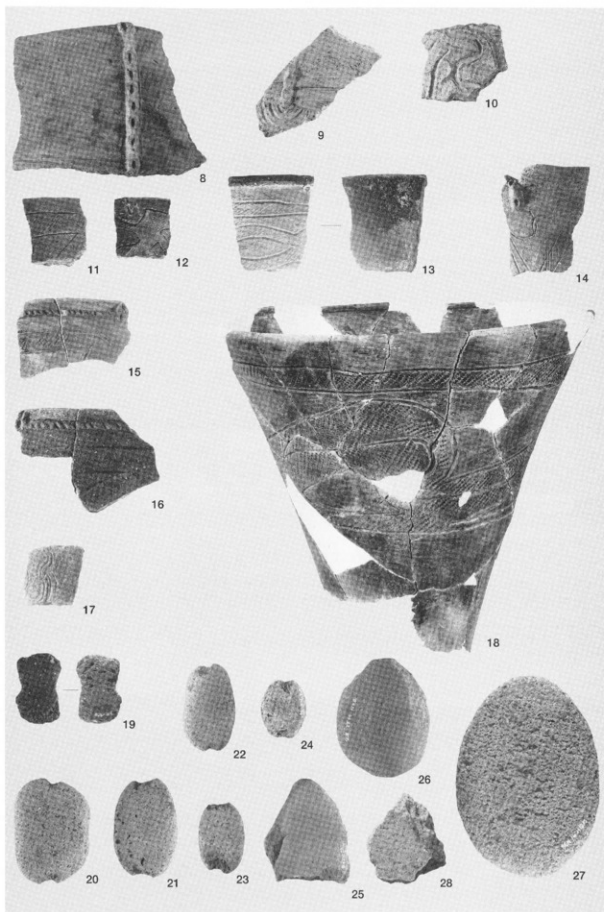
5. 1号土坑完掘全景 (西から)



6. 調査区土層堆積状況 (南から)



出土遺物 (1)



出土遺物 (2)

報 告 書 抄 録

ふりがな	べんてんいせきはつくつちょうさほうこくしょ								
書名	弁大遺跡発掘調査報告書								
副書名									
巻次									
シリーズ名									
編著者名	高野浩之 堀江隆之								
編集機関	山武考古学研究所 / 〒286-0045 千葉県成田市並木町221								
発行機関	下館市教育委員会 / 〒308-8616 茨城県下館市下中山732-1								
発行年月日	2004年2月27日								
収録遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
弁大遺跡	茨城県下館市大字女方字両海105-1, 105-7	08206	028	36°17'25"	139°54'46"	2003.10.21) 2003.10.27	15㎡	集合住宅建設工事	
種別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物				特 記 事 項		
埋没谷	縄文時代	埋没谷	縄文土器、土師器 石器（打製石斧・凹石・畿石・砥石・石皿・石錘）				縄文後期（堀之内式期）の 遺物がまぎらって出土する。		

資料の取り扱いについて

項目	取 り 扱 い 内 容
水洗い	すべて行なった。
注記	次の略号にしたがい、遺跡名・出土地点ごとに可能な限り行なった。 遺跡名 : BEN 出土地点 : 層中遺物 (1層・2層・3層)、ナンバ-遺物 (No)、SK (土坑)、ST (サトレン)
復元	可能な限り行なった。
実測	・遺物実測図は報告書掲載分の必要と思われるものに対して作成した。 ・遺物実測図は実測図と拓図に分けて図面ケースに収納している。この際、実測図と拓図が一致しやすいように拓図コピーを添付した。
写真撮影	・遺物写真は報告書に使用した遺物に対して全て撮影した。 ・写真は、遺構・遺物に分けてアルバムに収納し、撮影内容・撮影方向・撮影日記載の上、台帳を作成している。
台帳	・台帳類は遺物台帳、図面台帳、写真台帳に分けてファイルし、検索可能な形にしてある。
遺物保管方法	・出土遺物は、報告書使用と未使用に分け、収納箱に収めてある。各箱には収納内容を明記してある。

茨城県下館市
弁 天 遺 跡

発行 2004年2月27日

編 集 由武考古学研究所
発 行 下館市教育委員会
印 刷 株式会社文化観合企画
下館市常盤町吉台1-23-12
TEL 0476-93-0593